

一話・半人半霊の剣

妙——

衣ずれの音も無く、ただ無音の中で魂魄妖夢は構えをとった。半刻かけて足を開き、さらに半刻かけて腰を落とす。右腕が柳のしなやかさでゆらめき、陽炎のように、柄に手がかかった。鋭い呼吸だけが、一瞬静寂を裂く。

静止に至った妖夢が再び構えをとくのにまた半刻。隙間を埋めるように、凜いでいた空気がまたゆるゆると流れ出した。

風が生気を失ってひさしい。冥界を流転する風が生きる気配を持たないのは当然のことだが、妖夢が感じるのはそのようなことではなかった。どこか不透明で、先を見通すことの困難な、乳白色の色彩から豊かさが消えていつている。

鮮やかさが、消えている。

西行寺幽々子が眠りについてから、もはや数え切れぬ年月が過ぎた。

白玉楼は今も昔も変わらない。おのれの主人が目覚めぬ眠りについたとしても、それはかわらない。いや、変わったのかもしれない。かつてあつたにぎやかさが消えて、冥界にあるまじき静けさだけが永い時を支配していた。亡霊たちはひそやかに地に伏せ、天上にありながらここはもはや愉悦の場ではない。

ではそこで過ごす自分は何者だと妖夢は思う。

西行寺幽々子は自らの出自を知ること再び永劫の眠りについた。そのころのうちでどんな思いが渦巻いていたのか、妖夢は知らない。春先の縁側で、ふと今日の天気の話でもするうちに、彼女は妖夢に後を頼み、そして散歩に出かけるように眠った。死者が死の最奥へと去っていく。老桜に埋もれる自らの肉に、さらに魂まで置いて、彼女は彼女にしか分からないところへ行ってしまった。魂魄妖夢は後を託され、だからこそ妖夢は白玉楼にとどまり続けている。無為だ。

主を失った従者など、無意味だ。

今日もまた、庭を観る。見る人も居ない二百由旬の庭を整え、館を掃除し、誰が食べるでもない料理を作り、また剣の稽古をする。幽々子がいたところから、そして居なくなつてからも妖夢の日常は変わらない。むろん、違いは確実にあつた。だがそれをはつきりと認識せず、妖夢は毎日を過ごす。

それが西行寺幽々子の従者であることの証明であるから、妖夢はいつときも日常を崩さなかつた。

ゆえに――

ざ、と一斉に木々が揺れ、枝葉が大地に落ちる音を背後に、妖夢はいつおわるともしれぬ一日を開始する。

S

来客があつたのは、昼下がりの午後だった。

ふらりふらりと歩んでくるさまは亡霊でもないのに密やかで、夏の夕暮れが似合いそうな姿だった。

「ひさしく——」

と金色の九尾をゆらしながら、式神は袖にしまった両腕を軽く上げる。

口を開こうとして、唇の皮がひび割れた。

「お久しぶりです」

八雲藍はわずかに苦笑したようだった。時間の流れは式神の顔に色濃く残り、ほっそりとした貌かおには薄く影がかかっている風に見える。

八雲紫が忽然こっぜんと姿をくらましてからこちら、結界の手入れを行っているのは彼女だった。

そうだ……八雲紫も、消えたのだ。神隠しにあつたように、その主犯は忽然と幻想郷から消えた。式だけを遺して、幻想郷から。

時間が過ぎ去っていくのを、あとにのこったものたちは感じている。停滞している郷から櫛の歯が抜け落ちていく感覚だった。

誰もが気づいている。幻想郷がゆるやかに終わりへと向かっているのを。

縁側でいい、という式神に従い、いれる機会も少なくなつた急須に湯をそそぎ、そこで茶請けが何も無いのに気づいた。

「かまわんよ」

と相変わらず薄い笑いを浮かべ、式神は袖から腕を引き抜いて湯飲みに手を伸ばす。

妖夢も、湯飲みを手を取った。

かつては同じように主人の後ろに侍っていたものだったが、こうして茶を飲み交わすのが、普通になっていた。

湯気の立つ緑茶を唇に近づけ、それを久しく嗅いだ覚えの無かつた事に妖夢は少し驚く。

何ゆえ主人たちが消えていったのか……それを二人は語ることをしなかつた。語れるような話題でもなく、それをお互いに話してどうにかなるものでもないと思つていた。妖夢にはそれ

くらの分別がついていた。

だが――

「……もうそろそろだ」

「は……？」

「結界が、もたん。紫様がふたたび結びなおすか、あるいは巫女が復活でもせんかぎり、博麗大結界は近いうちに消滅する」

まったく平時と代わりの無い声で、式神は茶を啜る。

熱いなあという呟きが聞こえた。

「ああ、博麗は」

「さいごの……たしか……霊夢の、次の博麗はまだ居ない。もう現れないのかもしれない。あいつが死んでから千と五百年少し、今さら現れるとは思えんしね」

「懐かしい、なあ」

「お前は幽々子が寝てから、一度も顕界げんかいに降りてきてないからなあ」

もう、よく覚えていないことだった。半分ずつの記憶が式神の言葉を呼び水にわずかながら浮かび上がってくる。

そうだ――博麗霊夢に霧雨魔理沙、十六夜咲夜……西行妖を咲かせようとしたこと、鬼の宴、永い夜、再生する郷、それらを皮切りとした、さまざまな出来事。西行寺幽々子とともに在っ

たとき、あのころはにぎやかなことが多かった。

人は変わり、妖は忘れ、それでもなお。

その賑わいも、いつかゆるやかに収まっていった……それから先は、あいまいだ。

「結界が消えれば、幻想郷は外界との境界をうしなう。外の現実が幻想郷に干渉しだして、今のままではなくなる。幻想は幻想という枠組みを取り払われ、幻想郷が終わる。幻想と現実がふたたび混ざり合い、しかし現実として括られる。

それは我々の、死、そのものだ」

「そうか……」

かつて縦横に駆け回った地が消えるのにはわずかながら寂しさを感じた。幻想という闇が現実という光に負け、消えていくのも、把握しづらいが、残念だった。

だがいまの妖夢には、

(だからどうした——)

という感情のほうが大きい。そのていどの執着である。

式神は湯呑を左手に持ち替え、右手で袖を探った。煙管を取り出し、視線で火をつける。

ふかくふかく一服をついた。

「紫様から言伝がある」

「は？」

「記憶を封鎖されていた。式神というのは主の技術によって形作られるものだから、そういうこともできて……どうでもいいか。最近それが解けてな。だから来たんだ。お前のところへ」妖夢、と式神は相変わらず平靜な声色で前置きする。特別変化も無く、いつも通り、語り掛けるように、するりと言葉は喉を通り、唇から離れた。

『西行寺幽々子を起こしたいか』

死がいつとき場を満たした。冥界そのものの気配が、二人によって引いていた死気がすつと間に入り、何時いつのときもそうだったように静寂が訪れる。

なぜ、西行寺幽々子は眠りについたのか――

亡霊の悠々自適を遊んでいた彼女が永久の眠りについたので、その理由を妖夢は考えようとしなかった。否、考えようとして、やめた。それよりも託されたことに力を入れていた。延々と冥界に存在することを、白玉楼を保つということを行う。遺言のまま、そのなかで幽々子のことを考えられなかったのかというのと、そのとおり、考えられなかった。じっさいのところ考えたくはなかったし、だからこそこの長い間こうしていられるのだと言える。

半人半霊の寿命も、主の命の前では意味をなさない。それこそ永遠に、妖夢は幽々子の言いつけを守るつもりで居た。

なぜなら西行寺幽々子が眠っているからだ。

眠っているなら、起きるはずだ。

起きる、はずなのだ。

それを無理矢理起こすなどと。

「いつか……幽々子様は御自分で目覚める。そのときまで、私は」

「そうか」

と式神は頷き、

「幽々子は幻想郷を、幻想郷と境界をあいまいにしている冥界を守るために眠りについた」
わずかに妖夢は眉をしかめる。

「幽々子を起こしたいなら、幻想郷を立ち直らせればいい。それを、お前がやるんだ」

「何を言っている」

「お前が、幽々子を起こすんだ」

式神に似合わぬ力強さで、八雲藍はそう告げる。

「私は嫌だ」

「私は起こしてほしい。彼女が起きれば、紫様も帰ってくるかもしれない。もう結界の手入れはうんざりだよ。私は、雑用だけでいい。雑用というのは気楽なものだ。私は面倒なことはやりたくない。それに妖夢、どちらにせよ幻想郷が無くなれば冥界もながしか影響を受けるだ

ろう。それは君の本意に反するところだと、私は思うんだがね……」

そういつてまた式神は新しい煙管に火をつける。ゆるゆると紫煙が一筋たちのぼり、霞んで消えた。

「幽々子様はいずれ起きる。だから、冥界を守る。私はそのためにいる。幻想郷がどうなろうと、知ったことか。私にはこだけで十分だ」

「幽々子が、幻想郷を守るために眠っているとしても」

「私は幽々子様を頼まれた。他は知らん。そんなものは、その他、だ」

「フムン」

と藍はため息をつく。

「どうしてもだめかい」

「駄目だ」

「ではなぜ私を追い出さん。いまなら君でも斬れるぞ、魂魄二刀。……私の力など、あつてないようなものだ」

言葉のとおりだった。かつて大きな力を秘めていた式神は、自らの力量を大幅に上回る結果を前にして、己を削って対処していた。往時の影はすでに無く、一山いくらの妖怪程度にまで格は落ちている。大結界の消滅は、彼女の力不足が原因でもあった。

「決まっている」

と妖夢はゆるれることの無かった喉をわずかに震わせ、

「決まっているだろう……」

俯いた。

そういうことだった。

いくつかの前提があつて、それを自らに当てはめれば、おのずとなすべきことは見えてくる。そのとおりに妖夢はした。自分の意思を閉じ、なるがままにすごしていた。

長かったと、自分でも思う。

長い間、我慢し続けてきた。

「斬らないのであれば……いいではないのかね。もう、我慢しなくても」

式神はその表情を崩さず、微笑だけを浮かべている。自分の内側を見せぬ顔、なのに、妖夢には手に取るように彼女の心持がわかった。

我慢といえはそうなのだろう。かたくなに、石のように、自在だったはずの半人半霊はその本質的な在り方まで形を固めてしまっていた。人間と亡霊の半々という在り方は天衣無縫で、妖夢はしかし自分をそのようにしなかった。実に不自然であり、しかし、彼女にとってはそうするしかなかった。性格は頑なで、性根はまっすぐに、そんな妖夢が半人半霊の生き方などできるはずがない。相反する生き方が妖夢の選んだものだった。だから、これは我慢というだけではない。

意地だ。

意地だけで、こうしてすごしてきた。

だが、それ以上に大きな想いがある。

心という地層の奥深くに押し固めた、無視しようとしているのに、抗うことのできない重力で魂をひきつける、妖夢のすべてを覆す想い。

望んでいいのかと半人は思う。

求めていいのかと半霊は思う。

光明のように示された可能性に、ほんとうに手を伸ばしていいのか。

「幽々子様は許してくださいさるだろうか」

「許してもらえばいい。それができるのだから」

「幽々子様は起きてくださるだろうか」

「私の主人の言うことだ。間違いは無いだろう」

「だったら……」

脊髄が腹の中で捻^ひじれ溶かされるような気持ちちが濁流に似た激しさで押し寄せ、一瞬妖夢は目の前が真っ白にはじけたような幻覚に襲われた。届かないとあきらめて、それでも欲し、しかし押し込めていた感情があふれるのを止められない。

「私は」

身動きは取れなかった。すべては、妖夢のなかに留まっていた。何一つ放すことはしないとでもいうように。

少女は、少女に立ち戻りかけた妖夢は、すべりだす言葉を恐れるように、

「もう一度——」

S

時刻にして……未三^{ひつじ}つ時。

長く静を己としていた死の風が、だしぬけに動へと転じ、沈殿した死気が懐かしい色を帯びはじめた。

妖夢自らが結界の裂け目を断ち、ほとんど立ち入ることもかなわぬ場所であった幻想郷冥界、白玉楼に、今再び招かれざるものが入り込む。

風の動きが妖夢と藍の肌をなげる。ざわりと剣士の銀髪が鬼女のように逆立ち、金毛九尾が緊張に硬直した。

重音が、白玉楼に響き渡った。

「……斬る」

さきほどまでの小さな背中が嘘の様に、すうと妖夢は立ち上がり、静止しようと右手を持ち

上げた藍を声でさえぎる。

「いま、気持ち揺らぎました」

藍は待てという言葉に喉に押し込み、改めて腰を上げた。

一つ間を置いてから、

「待て……時期が来たと言っただろう。君はこの千年、細石が苔むすほど待ったのだから、い
ま少し辛抱してくれ」

「昨日の私ならばすでに斬っている。斬っていた」

柳のような柔らかい物腰で庭へと降り、確かめるように剣をとった。

抜くは、長刀楼観劍。妖夢とともに歳月を過ぎた魔劍は、彼女が初めて手に取ったときと
変わらぬ輝きを刀身に宿し、美しい波紋をあらわにしながら、いつでもそうだったように、今
また構えられた。

「石のごとくあれどもいざとならば雷と。今の私は石のまま。まだ、足りぬ。あの方に相応
しき侍従じじゆうとなるが我が望み。あの方が何時いつ帰ってこられようと万全にしておくが我が定め。そ
れ以外に路みちは無く、それこそが行くべき終。

——佞言ねいげん」

ざり、と妖夢の足裏が玉砂利を噛み、

「断つべし！」

向かい来る風の合間を抜けて消える。今まで立っていた半人半霊の空間に風がなだれ撃ち、式神の金髪をためかせせる。

「いかんだ……妖夢」

呆けたように呟かれた音は欄干に吸い込まれ、しかし藍は瞳に力を取り戻す。

「勝てぬ！ たとえ剣鬼剣聖の気力神技に通じ、冥府魔道ですら断ち切る今のお前であっても、その身ひとつだけでは駄目なのだ……！」

そして式神は決心する。去って行った己がたった一人の主人の、時を越えた言伝を、必ず成さねばならぬのだと。

追わねばならない。彼女の望むべき先を切り開く力を、教えねばならない。

それが自分の居る理由だ。

「右に翔符」「左に方符」

袖口より引き抜かれた両手には、紅の筆致も鮮やかな呪い符。

「気運招来——我が身を運べ、我が意を運べ。急々如律令」

途端、式神の姿が幻のように掻き消える。神にも等しい鋭さで二百由旬を走破しぬいたであろう剣士を追って、風を巻き込みながら式神は翔る。みしみしと過分な道力に全身が軋むのを感じながら、式神は、往時の力を失った式神は前を見据えた。

（持つか……いや、持たせる。紫様、今こそ役目、仕りましよう）